

変わる教育委員会

《第601回》

三島村は日本の保健室②

鹿児島県・三島村教育委員会
教育長 室之園晃徳



三島村の入り口の島「竹島」

みんな

しなやかに

まなび合う

「多様性」を受け入れる

子どもたちが親元を離れ、農山漁村の受け入れ家庭（里親）の元で暮らし、地域の小中学校に通う「山海留学」。三島村では全国各地から山海留學生を受

け入れており、その数はこの制度が始まってから24年間で延べ300名を超える。

全国から集まっているのは子どもたちだけではない。村が推進している「定住対策促進事業」で各地から移住してきた人たちもだんだんと増えてきており、旧地元人と新地元人との逆転現象が進みつつある。少ない人口の村においては、個人や集団間

に存在する様々な違い、多様性が全体に及ぼす影響は大きい。大都会東京の「ダイバーシティ」社会は、この小さな三島村においても同様であり、「ダイバーシティ」を生かすことが今後の村づくりの重要な鍵だ。

みんなが「しなやかに」

特にゆかりもない離島の小さな村に、どうして山海留學生として子どもたちが留学してくるのか。その理由は様々であるが、親元を離れてたくましく成長してほしいという気持ちは共通しているし、それぞれが何らかの克服したい課題をもっていることもまた共通している。

移住してきた方々の動機や理由もそれぞれであり、元々の地元住民と新しく入ってきた住民、山海留學生、そして離島教育のために赴任してきた先生方など、様々な思いや生き方が多種多様に混在している。

だからこの多様性の村でみんなが共存共栄していくために必要な資質は、「しなやかさ」だ。

「しなやか」とは、弾力があって柔軟なさまであり、考えや対応が柔軟なさまである。多様性を尊重する地域社会にするために必要なことは、しなやかに変化を受け入れる土壌づくりだ。

しかし、村社会は一般的に閉鎖的、排他的であるといわれる。そのような村社会に、多様性を受け入れたり、それぞれの違いを肯定的に認めたりといったポジティブな発想の転換が受け入れられるのか。山海留學も定住対策もこの課題と向き合いながら、寄せては返す波の如く行ったり来たりの繰り返しの中で、少しずつ根付いてきて現在に至っている。まだまだ発展途上ではあるが、島民の山海留學に対する評価は高い。それは、山海留學が島に与えている大きな効果を島民一人一人が感じているからにはほかならない。留學生を取り巻く教師や子どもたち、そして地域の人々全てがしなやかさを身に付けることで留學制度が存続し、多様性を受け入れる土壌が育まれてきている。